

## 関連学会の紹介—花粉に関わる4つの会

本会【植生史研究会】が発足する前段階に、【植生史研究談話会】の活動があったように、どんな【学会・研究会】にもそれなりの前段階、或いは水面下の活動があるのが常である。現生・化石の花粉・胞子を研究対象とする所謂花粉学に関する【学会・研究会】の前段階の活動は、当然のことながら、その研究対象が植物であり、同時に堆積物から発見されることから【学会・研究会】としては植物学会、地質学会ないしはそれらと関連する諸学会にあったであろうことは想像にかたくない。戦前は兎も角、戦後の活動の歴史を年代順に辿って見たのが以下の記事である。

● Coal Microscopy 同好会 (1953→1955)。1953-4、東大・理での地質学会の際に同好者が集まり、互いに連絡し合い、能率よく勉強出来るように、との趣旨から連絡機関として Coal Microscopy 同好会を発足し、【Coal Microscopy 同好会誌】、No. 1を1953-8-30に出版した。少しでも安く上げるようにとの配慮から府中刑務所に依頼した(徳永談)ザラ紙、ガリ版刷り、25頁のものである。これには馬淵精一、当時雄別炭鉱、が巻頭言を、島倉巳三郎、当時奈良学芸大、が花粉化石についてを、徳永重元、当時地調、が本邦における花粉分析研究論文解説を載せ、連絡先は記していないが徳永とした(徳永談)。No. 2も同様のガリ版刷り、35頁、1953-12-31発行だが、No. 3は誌名が【Coal Microscopy】と改まり、B-5判活字版となった。会費についてはそれまで触れていなかったが、No. 4、1955-2発行のに年100円以内と記している。この同好会誌は No. 5、1955-8の発行をもって終り、後続はない。この最終号には【石炭研究懇談会】の例会の報告や、地質学会第62年総会での【炭層の組織分析と花粉分析討論会】の記事があり、関連する例会や集会在他にもあったことを伺い知ることが出来る。

●花粉の会→日本花粉学会(1961→現在)。PSJ 通信、No. 1, Oct. 1961, なるA-4判の上質紙2枚を二ツ折りにし左端をステーブルで綴じたものがある。PSJはPalynological Society of Japanの略で【花粉の会】と仮称した。これは1961-10-14日本植物学会第26回大会の会期中に“日頃花粉を顕微鏡で眺めている者同志が集まり、種々話し合った……”ことをまとめ報告したもので第一回目の集会の記録である。当時茗溪会館に集まった方々は神保忠男、久内清孝、百瀬静男、石田肇、上野実朗、森隆也、幾瀬マサ、徳永重元、山田義男、田中清、岩波洋造、上原勉、森由起子、会津正義とある。午後5～8時の間に徳永はハワイ、パリノロジー、シンポジウムを、岩波は花粉の原子病を、幾瀬は東京タワーで集めた空中花粉を話題提供したこと、話しあった項目、研究者名簿がタイプ活字、謄写版刷りとして残っている。この【花粉の会】はその後毎年日本植物学会の開期中に関連集会の一つとして開催し、第2回、1962-10-8、名古屋大；第3回、1963-10-13、岡山大；第4回、1964-10-12、金沢大と続いた。毎回数名の話題提供があり、演者と演題のみは各大会の研究発表記録に載っている。筆者は第1回の時はアリゾナ大、第2回の時はオレゴン大にそれぞれ留学中だったので、以来この会に入会する機会がなかったが、第2回の会に出席された方々がハガキに寄せ書きして送って下さったものを保存していたので、御参考までに図1として御披露する。

所で、第4回の集会の際、名称を【日本花粉学会】に変更することが計られ、第5回、1964-11-28、鷺の宮高校で集会を持った時も名称変更希望が確認されたので、“……今後は日本花粉学会として発展してゆきたいと思います……”、と記録されているのが【日本花粉学会々誌、1、1965】、1965-5発行に出ている。ちなみに、



ないでもっているのだろう。そこら辺を書いたり発表したりする論集がないし、実はそこら辺に、しっかりした基礎がうずもれているものだ』という考えからこの花粉を発売する事になった……”と記している。体裁はほぼ現在のと類似するが、欧文による表現は一切なかった。本文は21頁で、多田洋の花粉とは何か、三木順一のミツバチと花粉、古屋正子のイネの開花と授粉、市河三次の浮彫【ナツメヤシ授粉】の謎、渡辺光太郎の柱頭反応覚え書き、西豊行の試験管内受精、体細胞受精について、鈴木洋の山形からの手紙、資料などで年額300円であった。確かに論文はなく、自由な形式をとり現在の同誌のあり方とは違っていた。ちなみに、最新号はNo. 20, 1987-3-20発行である。又、研究会では当初月2回の集会をもち、それが後で1回となったものの原則的には引き続いて行なわれており、最新号の記事によると第252回(1987-1-24)が渡辺光太郎の自家不和合性の分子生物学、であったと報じている。

●東京花粉研究会(1968→1978)。この会の発足に当って同好会誌【花粉と孢子】のNo. 1, 1969-1発行, ガリ版刷り, 16頁, B-5近似, の巻頭言に徳永重元, 当時地調, は“東京在住の花粉学関係者が……, 8月頃(前年の1968, 筆者注)石田肇, 川崎次男, 私の3名が会合し, ……肩のこらない研究会として続けてゆきたい……”とある。第1回は1968-9-1, 東大小石川植物園, 柴田記念館に21名が集まり, 会を発足し, 石田が世話人となって例会を持ち, 年会費500円とした。尚, オリンパス光学K.K. から援助を受けた。このNo. 1には9, 10, 11, 12月の4ヶ月分の例会での話題提供者, 演題, 要旨とか会員名簿, ニュース, その他が載っている。ほぼ, この形式を続け, 最終号, No. 16, 1978-12発行, に至るまで107回の例会をもった。また, No. 11, 1973-12発行, からは活字刷りとなり, 当初は年2乃至3回会誌を発行していたのが後半では1回になった。最終号と銘打ったNo. 16の編集後記に, “おいそがしい所発表後の原稿をまとめていただく必要がなくなりました”, と幹事が述べているのが印象的である。

他にも日本古生物学会での植物化石研究会やアレルギー学会, その他の関連する会があるのであろう。尚, この記事を作成するに当り, 徳永重元, 渡辺光太郎の両氏から種々昔の話をお伺がいし, それらが大層参考になった。両氏に感謝致したい。

(相馬寛吉)

## 〔書評〕

DEL COURT, P.A. & DEL COURT, H.R. 1987. *Long-term Forest Dynamics of the Temperate Zone*. 439 pp. Springer-Verlag, New York.

著者らは米国の新進気鋭のおしどり研究者である。DEL COURT, P.A. は地形・環境学を主な専門とするが、夫人の DEL COURT, H.R. は生態学・花粉学を主な専門とするから、2人からなる本書が植生史研究全般にわたる幅広い内容をもつであろうことが予想されるであろう。事実、本書は、植生史研究の中で最新の位置を占める植物群の移動や拡大、forest population dynamics などにおいて生態学の理論と豊富な植生史の情報を駆使して独自の分野を切り開いている。多少難解なところもあるが、この方面のこれまでのモデルが的確に紹介され、米国を主とするこれまでの forest dynamics に関する植生史研究を概観し、また新しい理論を学ぶのに欠かせない好適書である。

(辻 誠一郎)